

# 400年の庭園と風景をあるく

講師＝進士五十八（造園家・東京農薬大学名誉教授）

いわゆる名園、名勝、名所といわれてきた庭園、公園、そして風景は、それぞれの地域、それぞれの土地自然、風土、その立地と場所、その敷地条件を踏まえて、作庭家や造園家がその知恵、その個性と技術を駆使して造園、修景されたものなのです。だからこれを味わう最良の方法は、その土地その現場を実際に訪ね、歩くことです。

そこで今年は、主に東京の400年の現地を歩き、そしてこれとはまったく異う風土の北陸路の1200年を旅してみたいと思います。

ー 緑の東京史総論（5月）ー 前近代・近世江戸（2015年2月）ー 近代造園学の発祥（6月）ー 近現代のリゾート（11月）

ー 原風景武蔵野の作品化（7月）ー 現代造園家列伝（2015年3）ー 異風土サイトプラン体験（10月）ー 三富新田里山体験（2015年1月）



原宿・明治神宮



大磯・旧吉田茂邸庭園



新宿・京王プラザ

① 2014年5月23日（金） 講演 19:00-21:00 会場:ワタリウム美術館

## 緑の東京史総論:江戸から東京へ、庭から公園と風景への近現代

家と庭、それは人間生活の安全安心を保護する基盤。その一体となった家庭は人間生活の基本単位。これが集まって共同体が生まれ、地域社会の持続性のため様々な装置が工夫される。それが鎮守、並木、辻広場、行楽地である。都市化がこれを不可欠の緑のインフラへ格上げすることになり、江戸の花見は東京の公園緑地、パークシステムへ発展する。レクリエーション、防災、環境保全、景観へと多機能が求められ、作品性も強調されるようになる。江戸から現代社会までの変化と緑の多面的展開を学ぶ。

② 6月28日（土） 現地 13:00- 集合:原宿・神宮橋上（一の鳥居近く）

## 近代造園学の発祥:明治神宮内外苑造成の思想とかたち

明治天皇と昭憲皇太后を主祭神とする明治神宮は大正4（1915）年官幣大社として内務省告示、大正9（1920）年11月1日鎮座祭。2020年に百年を迎える。生物多様性の原理にもとづく、林苑構成の内苑と、欧州式のランドマーク（絵画館）とビスタ（通景線、並木）をデザイン原理とする外苑からなる。林苑は全国からの献木365種、約12万本が植えられた。青年団の奉仕や全国民の寄付によった点も重要。新国立競技場問題は、内外苑付近一帯が日本初の風致地区（準公園）指定地域であることを軽視したコンペであったことが原因。

③ 7月26日（土） 現地 13:00- 集合:ホテルグランドパレス（九段下）正面玄関前

## 原風景武蔵野の作品化:現代作家・深谷光軌、雑木の庭の造景と方法

上野の寺の息子で生まれたが、中年になって吉村巖、中島健に学びながら作庭活動に入るも、造園家と区別して自らを「外空間作家」と称した。コリント、ミケーネなどギリシャの旅でエッセント（遺跡）で、或る種“廃墟の美”に目覚め、武蔵野の原風景をテーマに深谷流“雑木の庭”を作品化する。京王プラザホテルの外構は、武蔵野とハケ（湧水）を表現し都民に親しまれている。深谷光軌の生没年（1926 -1997）。

10月25日（土）・26日（日）庭園研修旅行

異風土サイトプラン体験 ・ 北陸編 ： 若狭 ～ 越前 ～ 金沢ツアー

④ 11月22日（土） 現地 13:00- 集合:JR東海道線・大磯駅改札前

## 近現代のリゾート:大磯城山公園・旧三井本家別荘と旧吉田茂邸庭園

明治から昭和初期、富士を眺望する温暖かな湘南の海岸線の小田原、国府津、二宮、大磯、平塚、茅ヶ崎東海岸、鶴沼、鎌倉山、旧鎌倉、逗子、桜山、堀内、森戸海岸、一色、葉山の一帯には政治家、経済人、文化人らの邸園が並んだ。かつての緑豊かな公園や風致地区のリゾートエリアを、神奈川県が「邸園文化交流圏」と呼び、観光再生をめざす。三井本家別荘時代は「如庵」を含め、10近い古建築があったが、その土地を1983年県立公園とした。旧吉田茂邸は吉田五十八の建築、中島健の庭園設計、焼失後復元めざす、2013年9月庭園部を一部開園。

⑤ 2015年1月24日（土） 現地 13:00- 集合:西武新宿線・航空公園駅改札

## 三富新田里山体験:三芳町所沢市の柳沢吉保の村づくりと景観保全、雑木林で落ち葉掃き

埼玉県三芳町上富、所沢市中富、下富。川越藩主柳沢吉保が荻生徂徠の建議（中国王安石の新田開発方式がモデル）にもとづき曾根権太夫に命じて開拓させた計画農村。江戸期、元禄9年の検知では各91、40、49で計180戸。全914町歩3500石。1戸の間口40間（73m）、奥行375間（682m）、面積5町歩（15000坪、5ha）。街道並木、屋敷林、農家とにわ、川越芋や狭山茶の農地と家墓、防風林（落ち葉かき用の雑木林）の構成が短冊型に並ぶ循環型農法。多福寺はコミュニティの拠りどころ。世界農業遺産候補の里地里山。

⑥ 2月28日（土） 現地 13:00- 集合:東京メトロ銀座線・浅草駅地上出口4番（吾妻橋より）

## 前近代・近世江戸:川向うのリゾート、向島の新梅屋敷・百花園

仙台生まれの佐原鞠塙（1762-1831）。中村座、骨董屋（北野屋平兵衛）を経て文化元年（1804）梅園を開く。盛音楽、梅屋花品、群芳暦、都鳥考、秋野七草考、春野七種考、墨水遊覧など刊行。新梅屋敷、やがて酒井抱一が百花園と命名。大田南畝、大窪詩仏ら文人たちのサロンとなり、彼らの合作で造園された。萩のトンネル、ひょうたんやへちまの棚、春夏秋の七草、將軍御成座敷、29の句碑なども。三囲神社、木母寺、白鬚神社、向島七福神めぐりあり、墨堤の花見と、言問団子、桜餅などの楽しみもあって、向島界隈は川向こうの田園リゾートであった。

⑦ 3月27日（金） 講演 19:00-21:00 会場:ワタリウム美術館

## 現代造園家列伝:庭園、公園、緑地・作家の原風景とランドスケープのつくり方

石組、池泉、苔など伝統庭芸を誇る庭師たち、近代自然主義の芝庭や自然風の流れの上手、植治など作庭家、雑木の庭などやさしい自然景を創出する造園家、ビルと外構を直線的構図で一体化するアメリカンランドスケープを導入したアーバン・ランドスケープ・デザイナーなどこの200年でも多彩な造園のプロが輩出している。その手法、技法を概観するとともに、作家の原風景と作風の関係にもフォーカスをあててみる。そこに造園の根本を見つけることができるかもしれない。

現地へは、歩きやすい靴でご参加下さい。各回2～3時間の見学を予定しております。

進士五十八 しんじいそや

1944年、京都市生まれ。東京農薬大学農学部造園学科卒業。農学博士。専門は、造園学・環境学・景観政策・環境計画。東京農薬大学長、日本造園学会長、日本都市計画学会長、東南アジア国際農学会長などを歴任。著書に『アメニティ・デザイン』『風景デザイン』『農の時代』（以上、学芸出版社）、『グリーン・エコライフ』（小学館）、『日比谷公園』（鹿島出版会）、『日本の庭園』（中公新書）など多数。紫綬褒章、日本農学賞、日本造園学会賞。

○ 8月又は9月を予定しています。決まり次第、お知らせいたします。―― 講師＝妹島和世（建築家）

## 環境と建築

妹島和世氏は、西沢立衛氏と二人の建築ユニットSANAAとして、国内外で革新的な建築を数多く手掛けています。彼らの建築をひもとく大切な鍵は「環境」への思いや取り組みの方法です。近作、「ロレックス・ラーニングセンター」（2010年 スイス、ローザンヌ）、ルーヴル美術館分館「ルーヴル・ランス」（2012年）から最新作まで、実際の作品を取り上げてお話いただく予定です。

妹島和世 せじまかずよ

1956年生。伊東豊雄建築設計事務所を経て独立。95年に西沢立衛とともにSANAA設立。主な作品に、「金沢21世紀美術館」「DIOR表参道」、ルーヴル美術館の分館「ルーヴル・ランス」など。ブリツカー賞、日本建築学会賞、他多受賞数。

○ 8月2日（土） 19:00-20:30 ――― 講師＝塚本由晴（建築家）

## 建築のコモナリティ

今私たちが目にしている東京の風景は、第二次大戦後の復興を起源に持っています。そのときの復興は、できるだけ民間の力を引き出す方向性を持っていました。それが、持ち家を後押しする政策、社会システムを生み、その後の高度経済成長を牽引する大量建設時代につながりました。その結果GDPは高くなりましたが「豊かになったけど幸せではない」という状況も生み出しました。これはどういうことなのでしょう？

塚本由晴 つかもとよしはる

1965年生。1992年、貝島桃代とアトリエ・ワン設立。都市環境における建築の振る舞いをさまざまな相互関係から見出す。主な作品に、「ハウス&アトリエ・ワン」「ミニハウス」などの住宅、「みやしたこうえん」、「BMW Guggenheim Lab」などの公共空間がある。

○ 9月6日（土） 19:00-20:30 ――― 講師＝藤本壮介（建築家）

## Between nature and architecture

2013年のサーペンタインパヴィリオンは、藤本建築のルーツを解き明かし、過去10年にわたって多様に展開されてきたその建築的思考を結晶化するものだった。同時にそれは、この先の建築の出発点でもある。サーペンタイン以降の藤本建築の最前線を語ります。

藤本壮介 ふじもとそうすけ

1971年生。2000年に藤本壮介建築設計事務所を設立。主な作品に、「House N」、「武蔵野美術大学美術館・図書館」等、2011年には国際設計競技で「ペトンハラウォーターフロントセンター」及び「台湾タワー」で最優秀賞を受賞。



co - auteurs du Musée du Louvre-Lens : © SANAA / Kazuyo Sejima et Ryue Nishizawa - JAEY  
OU BERT / Odile Irigny et Tim Cullen - MOSACH PAYSAGISTE / Catherine Mestech  
Photographie © Hideo Suzuki



© Atelier Ben+Yoon / All Rights Reserved. photo : Atelier Ben+Yoon

BMW ググゲンハイム ラボ - ムンバイ



Photo : Iwan Baan

サーペンタインパヴィリオン

新企画  
建築の風景  
現代の建築家たちがどのように自然や風景を考え、取組んでいるかを知る新しい試みです。